

特集 ▼ 改革しつづけるアジアの教会

内戦と虐殺の歴史を経て

カンボジアの社会変化とキリスト教会

はじめに

カンボジアといえば、何が思い浮かぶだろうか。静かな田園風景に世界遺産のアンコール・ワット。観光地シエムリアップや首都プノンペンでは、豪華なホテルやショッピングモール、高層ビルが立ち並び、ほんの20年前まで武力紛争が続いていた国とは想像できない変容ぶりに驚く。私は1989年からほぼ毎年カンボジアを訪問してきたが、特に2010年以降の変化は目まぐるしい。

1999年にASEAN、2004年には世界貿易機関に加盟し、急速な経済成長を遂げている。2015年には1人当たりのGDP（国内総生産）が1000ドルを超え、「最貧国」の区分から脱した。とはいえ、国内の貧富の格差、独裁的な政治体制と不正の蔓延、言論の自由の制限など、経済優先政策の下で課題は山積している。

私は立教大学キリスト教学研究科の授業の一環として、毎

宇井志緒利

うい・しおり

1960年生まれ。南山大学外国語学部卒業、名古屋大学医学系研究科（国際保健）博士課程修了。愛知県にあるNGOアジア保健研修所（AHI）国際事業担当、世界教会協議会（WCC）カンボジアプログラム調整役を経て、現在、立教大学大学院キリスト教学研究科特任教授。

年学生とともにカンボジアを訪れている。10日間の訪問では、プノンペン近郊農村部のプロテスタント教会と信徒の家庭に、またシエムリアップ州北部の元戦闘地域にある仏教徒の村に滞在して交流を続けている。2017年2月には元ポル・ポト派支配地域を含むタイ国境沿いにある教会をいくつか訪れ、関係者から話を聞いた。これまでの私のカンボジアとの関わりと近年の訪問から見聞したことをもとに、カンボジアの教会の現状と課題について、プロテスタント教会を中心に報告する。

キリスト教の歴史

カンボジアのキリスト教の歴史は、16世紀半ばにポルトガルよりカトリックのドミニコ会宣教師が到来したことから始まった。19世紀後半から20世紀中葉の90年間フランス領となつたが、カンボジア人の間にキリスト教はそれほど広がらず、

信者は主に都市部に住むベトナム人・ベトナム系住民であった。17世紀初期には、日本のキリシタン70人がブロンペン近郊に住んでいたという記録がある。一方、プロテストントは、19世紀末にイギリスの聖書協会が入り、聖書のクメール語訳に着手した。20世紀前半にはアメリカの宣教師が入り、活版な活動をして徐々に都市部を中心に信者が増えていった。

ポル・ポト時代（1975年～1979年、急激な農村共産社会を試みたポル・ポト首相が率いた政権。この3年8カ月間に少なくとも国民の5人に1人が死亡）には、すべての宗教が全面禁止となり、宗教指導者は殺され、生き延びた者も国外へ脱出した。ポル・ポト政権直前の1975年には人口700万人のうち約1万人いたキリスト教徒は、1979年政権崩壊直後には200人ほどになっていたと推定されている。

ポル・ポト政権からの解放後も苦難の歴史は続いている。ベトナム・ソ連の支援を受けた社会主義政権の下、仏教の復興は奨励されたが、キリスト教は「西側の宗教」として厳しく制限・監視された。ポル・ポト時代を生き抜いた少数の信者たちは、他の人たちに知られないように、ひっそりと信仰を守り続けた。

キリスト教会が政府の公認を受けたのは、1990年になってからである。それはポル・ポト時代前に入信した三人のクリスチャン姉妹の父親の葬儀がきっかけとなった。当時は、キリスト教徒も信仰を隠して仏教式で葬儀を行っていたが、姉妹はあえてキリスト教式葬儀を決定した。それまで迫害を恐れてキリスト教徒であることを明かさなかった信者たちが続々と葬儀に参列し、人々を驚かせた。この葬儀をきっかけ



1992年1月、メコン川でプロテスタント教会合同洗礼式がもたれ、約200名が受洗した（左の写真・中央で話す女性が3姉妹の長女シタン牧師）

に、3姉妹の長女ヨス・シタンさんを含む10名の指導者が集まり、協議会を立ち上げた。

当時教育省職員だったシタンさんと宗教省大臣の妻が知り合いだったついで、3姉妹は大臣のもとに数えきれないほど通い続け、キリスト教会の正式認可を取るために奔走した。彼女たちの熱意は大臣を納得させるに至り、1990年4月

政府から正式認可が下りた。宗派を超えて信者1500人がブロンペンの講堂に集まり、喜び祝った。

国連主導による総選挙後の1993年に制定されたカンボジア憲法では、「信仰の自由」を認める一方で「仏教は国の宗教である」と定めている。その後、も家庭教会は、十字架や教会の看板を掲げず、目立たないように気を付けていた。私がつっていたシタン牧師の家庭教会でも、近所に音が漏れないようにと、むしろ暑い部屋の窓を閉め切って日曜礼拝を守っていた。実質的に周囲の目や行政の監視を気にしなくてもよくなったのは、それほど昔のことではない。

キリスト教徒の増加と地方で広がるプロテスタント教会

2017年現在、約1600万人の人口の大多数が、国教と定められた上座部仏教を信仰している。カンボジア政府宗教学省（2015年現在）によれば、仏教徒が95%、イスラム教徒が2・44%、キリスト教徒は0・65%とされている。キリスト教徒の数は、宗教学省に登録された教会やネットワークからの報告をもとに推計している。未登録の教会や小規模の家庭集会なども増えているので、実際の人数はもっと多いと思われる。「信徒数」とは必ずしも受洗者の数ではなく、日曜礼拝の参加者平均数が報告されているようである。

他の統計による推定は、1〜4%と幅広い。カンボジアにおけるプロテスタント系の最大ネットワークEFC (Evangelical Fellowship of Cambodia) の教会地図プロジェクトによると、2012年時点で人口の1・3%がクリスチャンで、教会数は明確にわかっているだけで2700か所を超えている。その7割は教会としての別箇の建物を持たない家庭教会である。都市部とベトナム国境に近い山岳少数民族の居住地域は他よりもキリスト教徒の人口比率が高い。最後まで武力紛争が続いていた北西部タイ国境沿いの州は、かなり低い。しかし近年、このような遠隔地域でプロテスタント系の入信者が増えている。一方、首都プノンペン周辺では入信者の数はそれほど増えず、小規模の家庭教会では特に若者が減る傾向にある。各地の様子をよく知る複数の教会指導者の話からしても、現在のキリスト教徒の割合は概ね3%（うち約1割がカトリック）と考えるのが妥当かと思われる。いずれにしても、カンボジア社会においてキリスト教徒が圧倒的な少

数者であることに変わりはない。

キリスト教徒の入信時期と特色

カンボジアのキリスト教徒は、ほとんどが上座部仏教からの改宗者である。個々人の信仰史を一般化してまとめることはできないが、カンボジアの時代・社会背景の変化に照らし合わせると、大きく3世代に分けられるであろう。

第1世代（ボル・ポト時代の前後〜1990年代前半までの入信者で、内戦と虐殺時代の経験者）ボル・ポト時代前の1970年代前半のロン・ノル政権時代、アメリカのキリスト教系NGOや宣教師の英語クラスや若者向けプログラムに参加したことがきっかけで、入信した人たち（前述の3姉妹はこの例にあたる）と、ボル・ポト時代後1980年代〜90年代前半に入信した人たちがこの第1世代に当たる。

ボル・ポト時代後の入信者の多くは、カンボジア国内ではなく、タイ国境難民キャンプでキリスト教系の救援団体を通して初めてキリスト教に触れた人たちである。難民になった自分と「難民だったイエス」を重ね合わせたという。難民支援に携わるワーカーの献身的な姿に感銘を受けた者、また欧米に移住するために改宗を申し出た者もいる。定住先で神学トレーニングを受け、宣教師として母国に戻ってくる者もあった。彼らは、海外とのパイプを活かして資金を調達し、カンボジアで活発な伝道活動をしている。この第1世代からは、強い信仰と使命感を持った多くのカリスマ的牧師や指導者が生まれ、現在も熱心に伝道活動を行っている。

第2世代（1990年代後半〜2000年代中期の紛争後復興

期の入信者）国連主導による総選挙が実施され、難民キャンプから大量の難民が帰還し、それに伴って国際援助が一斉に国内に流入した時期に入信した人たちである。健康問題や貧困など日々の生活課題が祈りによって叶えられたこと、困っていた時にキリスト教系の団体やワーカーに助けられたこと、就職につながる英語やコンピューターが無料で学べることなどがきっかけとなった。加えて第1世代による親族や知人への熱心な伝道の影響も大きい。

第3世代（2000年代後半〜現在の入信者）生活状況が改善して、生存レベルの課題がある程度落ち着き、宗教選択の自由が確立してきた時期に入信した人たちを指す。急速なグローバル経済の流入とコミュニケーション方法の変化によって、多重債務や、移住労働（かつては首都へ向かったが、近年外国での労働が急増）、若者の農業離れ、薬物依存症など新たな問題が出てきている。また、これまで頼りにしていた家族・親戚や地域における相互扶助の仕組みが弱体化し、人々は血縁・地縁を超えた新たなコミュニティを求めている。

元戦闘地域の教会

反政府闘争を続けていたボル・ポト派がリーダーの死亡に伴って投降し、武力紛争が終結したのは1998年だった。元ボル・ポト派支配地域で本格的な社会開発が始まったのは、他の地域から10年以上遅れて2000年代前半に入ってからである。新たにできた道ぞいには、小さな教会が建っていた。以前は、アメリカ、カナダ、オーストラリアなどの宣教団や、在外カンボジア人の仲介による支援が中心であったが、近年

は韓国からの支援、特に地方の小規模教会への建物支援が急増している。

この地域には他と異なる特色がある。前述した第1世代、第3世代の背景とニーズが同時に存在していること。そして、元支配地域では人々は仏教からではなく、特定の宗教をもたない状態からキリスト教に入信する、という点である。

元ボル・ポト兵で、2004年からバットンバン州のサムロート郡で牧師をしているサン・ホーンさん（61歳）の自宅と教会を訪問した。ホーンさんは17歳の時にボル・ポト派に徴兵され、半生を内戦の中で生きてきた。地雷で左足をなくし、その後タイ国境難民キャンプでしばらくすごした。紛争終結後にこの地域に来て、開拓した畑にキャッサバ（パイ



自宅前にある教会を案内してくれたホーン牧師夫妻

オ燃料の原料になるイモ類の商品作物で、近年キャッサバに転作する農家が急増）や胡椒を栽培して暮らしている。在米カンボジア人の牧師がこの村を訪問し、ホーンさんはこの村で最初の信徒になった。「新しい宗教は問題を起す」と、役場や警察から嫌がらせをうけながらも、近所の知人を誘い、徐々に礼拝出席者が増えていった。今は若者の参加が減って大人12人ほどが定期

的に日曜礼拝を守っている。クリスマスの特別行事には、近所の子どもたちも含めて100人も集まった、と嬉しそうに話した。

ホーンさんはキリスト教に入信した理由について語った。「自分は罪人であることを知った、だから入信した。あの（ポール・ポト時代の）悲劇が起きたのは、ポール・ポト派だけのせいではない。皆罪を犯した。今でも政治的対立や不正が起きている。他人をコントロールしようとしたり、利益や物を求める態度が変わらなければ、私たちはみな罪人である。でもそのことを知らないでいる」。他州の元ポール・ポト兵だった教会指導者や信徒からも同様に、「平等と公正」が実現されない今の状況を明確に批判する声が聞かれた。彼らが大切にしてきた信念は変わっていないこと、そしてそれがキリストの教えの中で新たな確信になっていることが伺えた。

元ポール・ポト派の第2の拠点であったバイリン州の牧師ブーン・ソテイーさん（38歳）は、「森に囲まれた悪い人たちが住んでいる地域」の教会への赴任を希望する者が誰もおらず、やむなく自分が手を挙げたが、この地で伝道してみても、他の地域とは違うやりがいを感じているという。「この人々は正直で、人との関係を大切にしている。みな正義や平等意識が高い。すぐには受容されないが、福音を伝えやすい」。

彼の教会の日曜礼拝には、60名ほどの人たちが集っていた。中には遠方から片道4ドル相当もの交通費を使って熱心に通う信者もいる。教会学校にも約100人の子どもたちが集う。元ポール・ポト派の2家族とブノンペンからの移住者1家族からスタートしたこの教会は、2011年以降外部資金に頼ら

ず、信者による献金で運営されている。ソテイーさんの懸念は、2006年頃には100人以上いた若者が約20人に減ってしまったことである。勉学や移住労働に忙しくなり、教会活動よりフェイスブックやITに時間を割くようになった。「親が体験してきたこと、信仰を幼い頃からしつかり伝えていく必要がある。信者の数ではなく質を高めたい」と語った。

キリスト教界の直面する課題と今後

最後にカンボジアの教会が抱えている課題として、4点ほど指摘しておきたい。ひとつは、教会がいかに宣教団体からの独立性を保ち、他教会と横のつながりを築き直すことができるか、ということである。1990年にひとつの協議会にまとまっていたカンボジアのプロテスタント教会は、その後各国からの援助やプログラム支援の急増に伴って支援者側の囲い込み競争に巻き込まれ、分裂していった。政府からは「カトリックは対話の相手が明確だが、プロテスタントはネットワークや協議会が多すぎて意見のまとまりがなくて困る」と批判されてきた。国レベルでプロテスタント教会とその指導者が連帯感と横のつながりを築きなおすには、まだ時間がかかりそうである。

第2の課題としては、政府との関係と、社会におけるキリスト者の役割が挙げられる。政府宗教学省は、2015年から定期的にキリスト教会指導者と政府との大規模な対話会合を開催するようになった。大富豪のアメリカ人女性と結婚したクリスチャンのカンボジア人ビジネスマンが資金を提供しているとのことだ。これが真の対話のための動きなのか、近い

選挙に関連した動きなのかはまだわからない。が、キリスト教界指導者には喜ばしい動きとして受け止められている。一方でまた政府は2011年に宗教省の仏教局の一部を独立させて、仏教に基づく仏教関係者による社会実践活動を強めるための部局「社会参画仏教局」をつくり、僧侶や寺の長老の質の向上のための研修に力を入れ始めている。これは、人々の具体的なニーズに応答するキリスト教会へ人々が関心を高める一方、俗的なスキャンダルが発生し与党人民党に管理利用されている仏教界に対する人々の信頼・尊敬が低下していることへの危機感があるのではないかと考えられる。このような状況の中で、キリスト者がいかに社会の発展に貢献できるかは、カンボジアのキリスト者たちの間でも重要な議題となっている。

第3に、若者の新たなニーズへの応答が挙げられる。かつては人々の生存に関わるニーズが圧倒的に高かったため、教会は貧困や健康問題の改善、就職に直接結びつく英語やコンピュータの学習機会の提供をしてきた。しかしもうそれだけでは若者は教会に來ない。難民キャンプで入信し、長年若者に焦点を当てた活動をしてきたウオン・セイラーさん（56歳）はいう。「我々の世代は、お腹を満たすことが一番の問題だった。今の若者は空腹や戦争を経験していない。しかし、心の中に怒りを持っている」。グローバルメディアを通して、他国の同世代の様子を知っている彼らは、なぜ自分の故郷、国はこのような状況なのか不満を募らせている。薬物やギャンブルに走る若者も急増している。周囲の大人が経済活動に忙しくなっていく中で、安全な居場所、信頼できる関

係、スポーツなどの楽しみも求めている。「自分で考える力、倫理と正義感を持った、民主的な次世代のリーダーを育てたい」と、セイラーさんは、若者が集う場づくりと若者向けのリーダーシップ研修に力を入れている。

そして最後に、第1世代の多くが高齢化していく中で、過酷な経験とそこから生まれた信仰をどう次世代に伝えていくかが大切な課題になっている。第1世代の子どもたちは、自分が子どもの頃にボル・ポト時代や内戦を経験し、親の姿を見て育ってきたため、強い信仰を受け継いでいる。しかしその次の新しい世代にとって、カンボジアの人々そしてキリスト教徒が経験したことはどんな意味があるのだろうか。

「カンボジアの神学とは？」とセイラーさんに聞いてみた。「ネットワークのリーダーが集まると、カンボジアの神学について考える必要がある、という話が出る。しかしそれを牽引する人が出てこないのが進んでいない。まずは第1世代の経験・歴史を記録していくことが大切なことだ」。今はまだ、それぞれの活動の充実と組織・財政的な基盤固めに忙しいということだろうか。

あの3姉妹の長女シタンさん、次女モリーさんも少しずつ記録をとり始めている。シタンさんは、長年しまつてあった1990年当時のキリスト教公認を求める署名書を見せてくれた。立教大学からの定期訪問も、そのモチベーションの一端となっていると感じている。当事者自身が、その経験をふりかえり記録していくこと、伝えていくことを、私は応援していきたいと思っている。